

昭和50年度音楽学フィールド・ワーク調査研究報告

盲僧琵琶の音楽

A study of Mōsōbiwa (盲僧琵琶)

小野 功 龍
大原 尉 子

本学音楽学専攻では、去る7月14日より17日に至る4日間に亘ってフィールド・ワークを実施した。今回の調査目標は、九州に伝えられる盲僧琵琶の音楽の採集であった。折悪しくこの時期は夏の土用行で盲僧達は廻壇法要のため諸地域に出向しており、集中的な調査は果されなかったが、成就院の御厚意により地神法楽法要の採集に成功した。又こうした本寺よりはるかに隔った国東や日向の盲僧の弾奏誦経を常楽院、極楽寺の御住職の御力添えによって採集することができ、盲僧琵琶の古態の一端をもうかがうことができた。本論は、これらの調査資料から、盲僧達の宗教活動の実態とその音楽の一部を報告し、いささかの拙考を述べるものである。

盲僧琵琶というのは、盲僧が琵琶を携えて弾奏誦経をするものであって、声明と共に仏教音楽のカテゴリーに属するものである。しかし、声明等を初とする仏教音楽、或は仏教に附随して展開して来たいわゆる仏教的音楽の歴史的な現象については、かなり解明されて来ているのに対し、盲僧琵琶に関する起源や歴史的変遷については、現在ある史料から確実に判断することがなかなか難しい。

しかし、僅少な資料にもかかわらずこれら盲僧琵琶についての研究はすでに行われており、可成りの成果が見られる。それらの内の重なるものを紹介すると、中山太郎氏が昭和9年に出された『日本盲人史』、同11年の『続日本盲人史』は斯研究の稿矢として、その業績は高く評価され、後の学究にも資するところ大なるものがある。又近くは、成田守氏が『伝承文学研究第15号(昭和48年)』に、[＊]地神盲僧伝承詞章考、同第17号(昭和50年)に[＊]地神盲僧伝承詞章考補遺、[＊]『臼田博士還暦記念論文集；口承文芸の展開(昭和50年)』に[＊]地神盲僧に関する一考察——豊前市地域における盲僧伝承を中心として——など一連の斯方面に関する論文を発表されており、特に実地調査の上から得られた資料を駆使しての論考は、大いに注目すべきものがある。又、盲僧琵琶に関する諸資料の集大成としては、五来重氏の編述によって刊行された『日本庶民文化資料集成第17巻(昭和47年)』があり、こゝに収められた盲僧達の弾奏誦経におけるテキスト類やその他の文献資料は、今後の研究者達によって大いに活用される価値を有している。

盲僧琵琶の音楽

しかしこれらの諸研究は、民俗学的、或いは文芸学的な視点から成されたものであって、音楽学的な視点より行なわれた研究は寡聞ながら知るを得ていない。又、こうした研究や諸文献からうかがう琵琶盲僧達の実態と、今回我々が行ったフィールド・ワーク実施の結果得たところの諸資料からうかがう実態とは可成りの相違が認められることも解り、今回のフィールド・ワークの有意義なることを今更に感じると共に、更にきめの細かい再調査の必要性を痛感する次第である。

琵琶盲僧達は現在、九州一円に散在しているが、北九州、成就院を本寺とする玄清法流と南九州、常楽院を本寺とする常楽院流の二種の系統のいずれかに属している。又これらの本寺は現在天台宗に所属しているが、盲僧寺院として法会における行儀や慣習のうえに他の天台宗寺院には見られない特異なものを有している。

成就院は現在福岡市南区西高宮にあり、天台宗玄清法流別格本山でもある。又、常楽院は鹿児島市吹上町中島にあり、この寺は日南市飢肥町の長久寺住職の管理の下にある。先にも述べたように現在九州に散在する盲僧達はこれらの寺のいずれかに所属しているのであるが、形式的な所属のみに止って、実際的な活動のうえにおいては、本寺とは無関係である盲僧達もある。それは、後に述べる国東半島や、日向地方の盲僧達で、特に日向盲僧などは一応常楽院系に属するものゝ、実際には延岡市にある盲僧寺院浄満寺を本寺のようにして宗教活動を行っている。

こうした盲僧達の行儀としては、彼等の本寺で行われる年間恒例の法要と、琵琶を携え檀徒の家々を廻って行う法要との二種の法要が揚げられる。前者を「法楽法要」、後者を「廻檀法要」若しくは「廻檀供養」と称している。

法楽法要とは、それぞれの本寺を中心として行われる法要で、定められた日に配下の盲僧達が本寺に集って行くところの法要である。

成就院で営まれる法楽法要としては、例年1月17日に行われる「初観音護摩供養法要」や、10月17日に行われる玄清法流の開祖であり成就院の開山である玄清法印の忌日法要である「玄清忌」などの法要が代表的なものといえる。一方常楽院では、例年旧暦10月12日に「妙音十二楽」といわれる法楽法要が行われる。

これらの法要は一つの法要形式ともいふべきものを備えており、ことに玄清法流の地神法楽では次に示すような式次第で行われる。

〔表Ⅰ〕

成就院法楽法要の次第
○伽陀
○三礼
○七仏通戒偈
○表白

盲僧琵琶の音楽

- 開経偈
- 経題
- 経
- 後唄
- 回向

この法要次第は又法楽法要における共通的な次第でもあって例えば、経典の読誦のところで、観音講ならば観音経、玄清忌ならば金光明最勝王経が、太鼓、その他の伴奏を伴う琵琶の演奏によって誦経されるわけである。その他の次第は、すでに天台宗における例時作法にみられるものとほとんど同じものである。

一方常楽院においては、次のような式次第である。

〔表Ⅰ〕

- 常楽院法楽法要の次第
- 三礼
 - 前楽
 - 回向神楽
 - 表白
 - 錫杖
 - 般若心経
 - 积文—うちまき
 - 积文—年号
 - 积文—わたまし
 - 积文—妙音の巻
 - 积文—琵琶の积
 - 积文—积迦の段
 - 回向神楽
 - 地神経
 - 円頓章
 - 回向
 - 三礼

これは、一般的な天台宗の法要次第とは著しく異なり、特に回向神楽とか积文、及び地神経に特色がある。积文は笛と太鼓による`楽、と琵琶の伴奏による`語り、とが同時に行なわれるもので、`楽、の編成は、回向神楽の編成と同様であるが、これには十二楽あって、俗に`妙音十二楽、といわれる。本来、この十二楽は、积文の十二通に対応して存在していたと思われるが、現在では、次の六通しか読まれない。しかもその間に十二楽全部を行なってしまう。

〔表Ⅱ〕

1. うちまき—松風・村雨
2. 年号—杉の森
3. わたまし—杉の森

盲僧琵琶の音楽

4. 妙音の巻一軒の水
5. 琵琶の釈一五調子・六調子・七撓・八撓
6. 釈迦の段一忘れ撓・盤渉・鳳の声・後生楽

さて、盲僧達の宗教活動は、何もこれだけではないのであって、むしろ、これから派生したところの琵琶を携えて壇家から壇家を廻って行く廻壇法要の方に盲僧本来の行儀があるといってもよい。

北九州における廻壇法要というのは、最も主要な法要は「土用行」と称するもので、例年四季の土用の節が来ると、盲僧達は壇家の家々を訪れ、竈の傍や、仏間に祭壇を設け、米塩等を供えて、携えて来た琵琶を弹奏しながら荒神経・地神経の読誦や、荒神和讃・釈文などの唱誦を行ない、荒神・地神の荒魂あらたまを鎮め、一家の繁栄隆昌を祈願するのである。こうした土用行の行なわれる主たる目的は、竈祓い、即ち竈の神を祓うことである。

日本民族の固有的な信仰形態の中では、竈の神というのは、火災の神、そして忿怒神・火宅神であると同時に、又、祖霊神でもある。このことについては『統日本紀』に

天平三年正月、神祇奏、庭火御竈四時、祭祀永為常例……

とあるように、奈良朝時代に、すでに竈祭のあったことが解るが、平安朝時代は、これを行うのは専ら陰陽師おんみょうじであった。

一方、仏教の伝来後、神仏習合思想の抬頭によって、経典の中にみられるところの地天即ち地神といわれる仏教の守護神と、様々な所説があり、その基本的な姿は不明ではあるが、そうした諸説を総合してみると、慈悲の相と忿怒の相をもって大衆を救うという三宝荒神とが竈の神に投影されてくる。即ち、竈の神と地神と荒神の三者が未分化のまま、日本の民俗信仰に溶け込んで受け継がれてきた。その時期については確言することは不可能であるが、こうした信仰を宣揚させたのは密教、ことに修験道であると考えられる。しかも、盲僧が、修験道に非常に関係が深かったということは、すでに五来氏も成田氏も指摘をされておられる通りである。

今日でも荒神信仰というものは、盲僧の荒神祓いとは別に、多くの人々、商家の人々の信仰を集めている。特に、先述の如く盲僧は土用行において竈祓いをする。この土用行の他にも廻壇法要においては、臨時的なものとして、家宅の新築・改築に際し、家宅神である地神を祭る「地鎮祭」、竈を取り除いたり改修する際に、竈の神を祭る「火あげ」、井戸を埋めたり改修する際に、水神を祭る「水神上げ」等の諸祓いの他、結婚に際しての子孫繁栄・一家隆昌の祈願、旅行の平穩無事の祈願等、予祝的行事、家や人にまつわりつく邪霊を祓う「亡霊落し」もうれいおとし等の際にも招かれて弹奏誦経を行なう。

その際の所依経典の中心となるものは、地神経と荒神経と釈文であるが、成就院系玄清法流においては、荒神経及びその関係経典だけである。

廻壇法要の所依経典は、非常に特異性を持っていて、それは本寺における法楽法要と少し趣

盲僧琵琶の音楽

が違っている。

さて、そこで、寺院法要も廻壇法要も含めた盲僧の所依經典はどういうものであったろうか。これは、ある意味では、盲僧の宗教的な位置付けと、盲僧の活動の実態の一端をも解明するための一つの手掛りになるといえよう。

そこで、成就院・常楽院両系を含めた所依經典について述べてみると、まず明治38年（1905年）に、天台宗務庁から発行された『天台宗地神盲僧規則』の中に、地神盲僧所依の經典の名称が出てくる。それは、次の如き經典類である。

〔表Ⅳ〕

<p><u>玄 清 部</u></p> <p>○仁王護国般若波羅密經</p> <p>○金光明經</p> <p>○大日經</p> <p>○堅牢地神陀羅尼經</p> <p>○妙法蓮華經</p> <p><u>常楽院部及び一般地神盲僧</u></p> <p>○仁王護国般若波羅密經</p> <p>○金光明經</p> <p>○大日經</p> <p>○堅牢地神陀羅尼經</p> <p>○阿弥陀經</p> <p>○不動經</p>

一方、もう一つ明治38年より26年前の、明治12年（1879年）に、豊前盲僧の練習すべき諸祓い法、及び練習の読経を示した文献が、やはり成田氏により紹介されている。それは次のようなものである。

〔表Ⅴ〕

<p>① 地神大陀羅尼經</p> <p>② 法華經普門品</p> <p>③ 荒神陀羅尼經</p> <p>④ 般若心經</p> <p>⑤ シャクショウ（錫杖）</p> <p>⑥ 觀世音經</p> <p>⑦ 神名帳</p> <p>⑧ 大幸神（大荒神）</p> <p>⑨ ヒミツダラニ（秘密陀羅尼）經</p> <p>⑩ シャウコシン（淨荒神經）</p> <p>⑪ ハピイコラ心（八臂荒神）經</p>	<p>⑫ 琵琶の積</p> <p>⑬ 荒神の積</p> <p>⑭ 心利經</p> <p>⑮ 秘密經</p> <p>⑯ 地神式經</p> <p>⑰ 地神經</p> <p>⑱ 地神和サン（讚）經</p> <p>⑲ 荒神シズメ（鎮）經</p> <p>⑳ 水神經</p> <p>㉑ 不動經</p>
--	--

盲僧琵琶の音楽

これらを比較すると、明治38年の方は、地神陀羅尼經を除いては、天台宗に行なわれる極く一般的な經典が、所依經典として課せられている。これに対し明治12年の方は、豊前盲僧という一地方の盲僧のための課誦であり、しかも、彼らは玄清法流の系統に属しているのではあるが、その所依經典は、つまるところ荒神經・地神經・釈文の三種のものに限定することができる。

この差異について、一先ず明治38年の『天台宗地神盲僧規則』において、盲僧達が、社会的地位を認められるに至ったことは解るが、一方、排仏毀釈以来、神道的な行業を排する、つまり、神官と同じようなことをするというを、極力忌避して、仏教本来の活動に帰るといふ運動を推進したために、明治38年の時点で、形式的に整えられ、明治12年に定められていたような經典は、表面上割愛されてしまったものと思われる。即ち、このことによって、盲僧本来の宗教活動が、著しくせばめられたということもできる。

しかるに、玄清法流における、盲僧の所依經典のスタイルというものは、明治12年の伝承法届に見られるようなものであったということが推測される。実際に、現在成就院では、寺院法要の場合、観音經や金光明最勝王經堅牢地神品が行なわれているが、廻壇法要の場合はこれと異なり、荒神經の音誦・訓誦、荒神和讃の唱誦がその中心課誦となる。ただし、般若心經や不動經なども付加的に誦誦される。

それに対して常楽院では、徹底して釈文の誦誦が多い。寺院法要においても釈文中心であったが、廻壇法要の勤行次第では釈文の誦誦しか行われぬ。

釈文というのは、荒神經や地神經等の經典を取意翻譯したものというべきものであるが、更にそこに修験道などに行われた説話的な要素が加えられ、一編の仏教的語物として編成されたものともいうべきであって、經典の誦誦が地神や荒神への^{たましじ}魂鎮め、といったような呪的性格をもっているのに対して、釈文はむしろ大衆に対する唱導説教的な意味合いが強いように思われる。

釈文はかつて玄清法流においても行われていたことは、福岡県文化会館蔵の^{*}盲僧琵琶資料、中に数曲の釈文のテキストが収められていることから解るが、現在はほとんど行われていないようである。これに対し先述したように常楽院系においては、法樂法要廻壇法要を通じて釈文の唱誦が中心となる。従ってそのレパートリーも多様である。次に掲げたのは、常楽院系の釈文のレパートリー一表であるが、(1)は現在中島常楽院に行われるもので全部で12通を数える。(2)は日南市飢肥の常楽院に伝えられる釈文の詞章より採出したもので11通を数える。最後の(3)は日向延岡市浄満寺に現行される釈文で、14通を数え、これら三者の内では、最もレパートリーが多いといえる。

盲僧琵琶の音楽

〔表Ⅶ〕

イ) 中島常楽院	祝詞(うちまき)	年号	神渡(わたまし)	星の段	夢の段	本経	妙音の卷	琵琶の卷	釈迦の段	はんごん釈	勝負分				廻向			
ロ) 長久寺常楽院		神名	地割	星の段		本経(地神経)		琵琶の借	釈迦の段	王子の借	四方立	勝負の段		島広	廻向の段			
ハ) 長久山浄満寺	本地経	神名帳				本経		琵琶の釈	釈迦の段	王子の釈	四方立	門前の段	装束立	しき広め	氏広め	稲揃え	荒神揃え	神送り
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪				

イ)とロ)とはその系統のうえにおいては同じであるから、各曲の名称や曲数のうえに大きな差異は認められないが、ハ)については、イ)ロ)に共通なレパートリーに加えて多様な釈文の存在が認められる。この長久山浄満寺は常楽院系の盲僧寺院とはいふものゝ、独自の活動を行っており、その配下の盲僧達も日向盲僧としてむしろこの寺を本寺の如くにして活動して来たのである。従ってそこにはイ)やロ)とは異ったはるかに多種の釈文が伝えられて来たものと推察されるのである。

次にこれらの釈文の大略の要旨を記したのでこれを御参照願いたい。なお曲に施した番号は、長久寺常楽院のものを中心にして考えた。

- ①は、我国の全国の神祇を数えあげ勧請するもの。
- ②は、盲僧の発祥の地である日向鶴戸神宮における縁起を述べたもの。
- ③は、七曜二十八宿と荒神の姿を述べたもの。
- ④は、地神経の経意に由来するもの。
- ⑤は、琵琶の各部の名称を諸仏諸菩薩の名に蒙り、琵琶弹奏の功德を述べたもの。
- ⑥は、釈迦の一代を述べ、併せて地神・荒神眷属の徳を述べたもの。
- ⑦⑧⑨⑩は、三宝荒神の五人の王子が天地を統括支配するまでの説話を述べたもの。
- ⑪は、土荒神を初め、諸神に招福を祈願するもの。

盲僧琵琶の音楽

これら(イ)(ロ)(ハ)の三者に共通するレパートリーのうちで、①④⑤⑥⑦⑧⑨の各曲は釈文のうちでは最も重要なものと考えられる。しかも盲僧琵琶の性格をうかがううえに興味ある問題を提起する。

すなわち①の諸国の神祇の勧請、④の地神経の釈である。又⑤の琵琶の妙音功德、⑥の釈迦讚嘆、は盲僧における宗教活動の基本的な概念を示すものである。更に⑦⑧⑨は荒神の5人の子息の領地争いに対し、門前大王がこれを仲介してそれぞれ天地を分割統治せしめる説話で、古来より山伏神楽のレパートリーにも見られ、盲僧の宗教的活動のうえにおいて、修験道とのかゝり合いが非常に深かったことが示唆されるのである。

次に成就院や常楽院等の本寺とは隔った地にある盲僧達の活動を紹介したい。

まず国東盲僧は、現在僅か3人ばかりで、その内1人は病臥中である。それで現在は、健勝な2名によって輪番で営まれる4月17日と10月17日の年2回の、玄清法印御開山法要の他は、専ら廻壇を本務とし、琵琶を携え、国東半島一円を廻っている。このことからみても、成就院系に属しているとはいうものの、言わば独自の活動をしているとみなしてもいいだろう。

国東盲僧の廻壇は、春夏秋冬の土用行の他に、地鎮祭・水神祭・竈祓いの他、婚礼・旅立ち・就職などの折の「艮神祭」、正月中心に行なわれる「おひまき」、更には極く稀ではあるが「亡霊落し」などにも請われて弾奏誦経を行う。

次に国東盲僧の土用行の一般的な勤行式を挙げてみる。

〔表Ⅶ〕

(1) 祈願文	
(2) 開経偈	
(3) 八臂荒神経(訓読)	琵琶弾奏
(4) 仏説大荒神秘密神咒経(訓読)	琵琶弾奏
(5) 竈讚嘆式(竈の御本地)	
(6) 三宝荒神和讃	琵琶弾奏
(7) 不動経或は般若心経(真読)	琵琶弾奏
(8) 廻向文	

これをみると、徹底して荒神経中心の勤行次第あることがわかる。

八臂荒神経は、すでに明治12年の豊前盲僧の伝習法届の中にも同じものがみられる。従って豊前・豊後盲僧の間には、少なくとも所依經典をめぐって何らかのつながりがあり、しかも往時、玄清法流の所依經典にまで、示唆するものがあるが、現在成就院玄清法流では、これらの經典は用いられない。

この式次第のうち、八臂荒神経・荒神神咒経・竈の御本地、これらのものは、経と名付けられながら訓読で行なわれるのである。

又、常楽院系とされる日向盲僧の場合には、現在10人程の盲僧がいる。しかし、彼らは、常楽院へは行かずに、先述の日向の延岡市にある浄満寺を本寺のようにして、年1回集まり『三

楽』即ち、太鼓・笛・釈拍子の伴奏を伴う弾奏釈文を行なう。それは、前掲の表Ⅵの(イ)中島常楽院の妙音十二楽に対応するものである。

彼らの廻壇法要は釈文と地神経であり、その釈文の数は14通と、中島常楽院よりもレパートリーが広いということは、前掲表Ⅵの説明のところで既述した。

如上のことがらよりまず所依經典の問題については、明治38年の『天台宗地神盲僧規則』に制定されたよりも遙かに多くの經典類が、廻壇法要を中心に、実際には存在しているということがいえ、現在、荒神経・地神経・釈文といわれるものが、読誦經典の主流になっている。

しかも、その廻壇法要における成就院系と常楽院系の現在の經典の大きな違いをみると、成就院系の方は、様々な荒神経の訓読及び荒神和讃と、こういうようなものが中心になってくるのに対し、常楽院系の方は、釈文が中心といえる。そして、この釈文は、唱導説教的な意味を持つものである。

北九州の方でも、釈文がないわけではないが、だんだんすたれて、あまり行なわれていないらしい。そのかわり、荒神経を中心とした訓読經典及び和讃が、むしろ唱導説教的な役目を果たしているのではないだろうか。

さらに、この玄清法流の系統には『くずれ』といわれる『軍談』が行なわれている。肥後盲僧にいたっては、むしろ『くずれ』のみを本行とするものになってしまい、最早盲僧とはいえない状態になっている。

一方、常楽院の方では、釈文を非常に忠実に守った。特に、第45代院主・江田俊了師が『くずれ』を、盲僧の琵琶法師が語るということを、つとに戒めたので、今日では『くずれ』は行なわれなくなってしまった。むしろ釈文を固守・遵守して、それが唱導説教的な役目を果たし、今日も伝承されていると考えられる。

冒頭にも述べたようにフィールド・ワークにおけるその後の整理作業は未だ続行中であるが、本論においては、先ず歌詞の聞き採り作業と琵琶の採譜の終了したものの中から3曲を選んで紹介しよう。

盲僧の弾奏誦經における音楽詞章の伝承は、すべて口承であり、定ったテキストは存在しない。しかも伝承過程において誤伝されたと思われる部分や、訛言化した部分があり、とくにその詞章の聞き採りは至難である。しかし詞章の内容を明確にすることは、盲僧の宗教的活動の理念を明白にするうえで重要な手掛りを与えることになるであろうし、又、ひいては、音楽史、仏教史、文芸史等のうえにおいても資するものとする次第である。

今回本論に採り上げたものは、国東盲僧の伝える『仏説大荒神秘密神咒經』、『三宝荒神和讃』、『八臂荒神経』の3曲である。これらの諸經典は国東盲僧の廻壇法要に行われるもので、これらが勤行式のうちでどのように唱誦されるかについては、先掲した国東盲僧の勤行式

盲僧琵琶の音楽

を御参照願いたい。

これらの諸経の内^{*}荒神神咒経、は、現在国東盲僧独特の所依經典ともいうべきもので、同種のもの、成就院系にも常楽院系にも見られない。又、^{*}三宝荒神和讃、は成就院系にも伝えられているが、国東に行なわれる和讃は七・五調に字余りが多く、文意も洗練されていないが、素朴な感じがする。

荒 神 神 咒 経

^{*}荒神神咒経、は、国東盲僧高木清玄師の演唱によるもので、国東盲僧の廻壇供養に読誦される經典であり、専ら訓読で行なわれる。あるいは「神姿経」と書くべきかもしれない。出拠および蔵本は不明で恐らく偽経ではないかと思われる。経と名付けられてはいるが、經典の体裁を採らず、むしろ和讃のような文体を採っている。三宝荒神の仏界における相を述べたものと判断されるが、荒神の姿については仏教教典中に本説がなく、しかもその本地垂迹の關係については諸説が見られ定かではない。しかしここに掲げられている仏、菩薩、神はさまざまな儀軌の中で何らかの形で三宝荒神の本地や垂迹の姿と關係をもっている。特に五大明王は、金剛界曼陀羅の第八、降三世に現われるが、それは仁王経に説かれている所である。如来が内外の魔障を調伏するため忿怒形に姿を変じて現われたものといわれ、なかでも不動明王は大日如来の転身であるといわれる。空海の書と伝えられる『三宝荒神祭文』には三宝荒神の本地を文珠菩薩或は不動明王とし、『荒神供式』には大日如来とあるところから、いわゆる荒神の曼陀羅を、此の経では述べようとしているのであろう。

先ず冒頭の「南無荒神……」より「……唵急々如律令と敬って申す」までは一種の祈願文の如きもので、この部分では琵琶の弾奏を加えない。この文の唱誦の終わり頃より短い琵琶の間奏が行なわれるが、その前半は先のテンポとリズムを受け、やや緩慢な弾奏が続く。後半に至ってにわかにリズムカルなテンポになり、これに乗って「南無東方云々……」以下終わり迄一気に唱誦される。

三 宝 荒 神 和 讃

^{*}三宝荒神和讃、は、高木清玄氏と、宝珠院住職中野清信師との2人の演唱によるものである。

国東の荒神和讃も筑前のものと大略同じ内容構成を採っているが、所々の字句が違ったり、また、原則的には七五調の文体であるものの、字余りの箇所もあり、全体としては筑前の和讃の方が洗練されている。しかし冒頭における三宝荒神の本地とその出現のくだりとを述べた条は筑前の和讃にはない。この部分は、荒神経における経旨を極く極く平易簡潔にのべたものと思われる。

盲僧琴瑟の音楽

ゆるやかな二拍子のリズムに乗って演唱者は旋律的な朗唱でこの和讃をうたいあげていく。

八 臂 荒 神 経

八臂荒神経は中野清信師の演唱である。正式には「仏説三宝大荒神福德円満陀羅尼経」と称し、漢訳の経典を忠実に訓読に写したように著わされている。しかしこの経題は荒神経に似せて作られた偽経かもしれない。いうまでもなくいかなる蔵本にも見られない。

しかし、前出したが成田守氏の調査によって発見された明治12年の豊前盲僧の誦経伝習届の中に「ハッピー荒神経」というのがあり、豊後と豊前との地縁的な関係も考慮して或いは同種の経典かとも思われる。しかも此の経を伝習するグレードは7段階のうち、6等の所にあり、かなり下位にあることから普遍的な経典であったことが解る。経意は、火神である三宝荒神が、その八臂の相、すなわち大日・弥陀・釈迦の諸仏、および文殊・普賢・観世音諸菩薩の転身であることを示し、更に善悪両心を以て衆生済度することを述べたもので、この経意も荒神経に述べられる経意よりヒントを得て、これに修飾の加えられたものと思われるが、国東の廻壇法要では荒神祓いや竈上げの際に必ず誦読される経典の一つである。

経題の唱誦について琵琶の伴奏と共にかなり早いテンポで誦読される。

上記三曲の採譜及び詞章は、P102～P110に掲載したので参照されたい。

(大学音楽学部 助教授)
 〃 副 手)

仏説大荒神秘密神咒經

演唱 高木清玄

採譜 大原尉子

祈ま - - っ - - て - - もう - - す - -
 なるとうほうに
 こ - - さんせやしゃあつたなる なるほうにぐんたりにやしゃあつた
 なる さいほうにたいこくやしゃあつたなるほうにたいこんごうやしゃ
 あつたなるちのほうにのみん たいにち たいほう ぶどうあつた
 たいごうあつたの なる かみせん ほうごう じんじん じんじん じんじん
 3くわい とよの びつせへあつたは物のあつたきりじうのさへなるはときを
 (のあつた)
 もて たいへい なるのんそくさい なるかきせんはなるほうにたいあつたのこきとう
 Tutti



荒神神咒經

仏説大荒神秘密神咒經

南無荒神 天行正王 祇園牛頭天王、本地は大日
業師不動 文殊災難消滅惡魔降伏唵 急急如律令
と敬って申す。

南無東方に、降三世夜叉明王、南無南方に、軍荼
利夜叉明王、南無西方に、大威徳夜叉明王、南無
北方に、大金剛夜叉明王、南無中央に、観慢大日
大聖不動明王、五体五竜王、五王の御神、三宝荒
神堅牢大地神三十六体、豊の日つきの大神、まず
は竜王、吉日、神に適うは時を以って大平安穩息
災延命子孫繁昌如意安全の御祈禱なり。

三宝荒神和讃

演唱 高木清玄
 中野清信
 採譜 大原尉子

ん じゆん ぶつに ぞとせ
 り - しゃ じゆん さい どの せの ために - ほ ち どの うて なる
 天かき ありくか いた 天にの せ ぶか く われ り せ いたの じゆん となり
 - さん ほう ぶつ ねん げん ぜん し - ぶい ころ じゆん と なる ちゆう して ちゆう
 ちゆう ぶつに ぞとせ - ぶく とく せん ぜん ぶつ のん に - ちゆう なる
 どの せい せん ぶつに なる じゆん なる ちゆう なる なる に -
 かま せ - ぶい じゆん なる なる なる - わが じゆん なる なる なる なる なる なる なる なる
 せん ぜん じゆん なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる
 かい に - なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる
 下 ぶつ なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる
 ぶん なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる

盲僧琵琶の音楽

阿字ともがらほ のち にはふさきと なること ぞ — 11えの 氏んせつ 11天の
 も — わさわい さつて さかえる せ — ありる かなんの ちも きえ て ん
 ま けどうも ちかすかす — あり びつ (は びつ) も のが けう る — これほど ま
 くれ 天も うの に かなどをけがし せまつせば — 天いこう じ
 も いも めて さい なんげん 11と 11り せ — かなど 913 11り けいせつ 11 ぬ
 さね ぶに こころが け — つめる — 天ききも きを つけて —
 けがさぬぶに 11天-しつ — せうじ 天い いち ちを けせよ — 天い
 こうじんの いましの 11 かなど のまえにて 11 かなどよ
 11か 天いこうじんの いましの
 に 11かほどは けが 天つとて も かなど の まえ 11にて 11かなど 5 ぶねの — くら
 しけ 天えきなく ありやう とも に ありやかと — ありやう 11
 の きに 11て ありの こころを よう 11せ せう 天い 11ふさ 天つせ

盲僧琴瑟の音楽

く - しんせく 衣にんわごうして 衣の しつぎひを おくろべ しんごう
 じんの よろこびせ - かたや かたにちをうごくとく
 いえや 衣のみに つきせうて - さんせのし ぶつともしもに - こ
 こくは いちりやう じんばい に - よろぢの 衣のらほみごせや - かたうし
 ばい ばいしやう - 衣に せいて 衣のやかに - せんせはくせん
 のん に - 衣のいは かならうし じゆぶつと - 衣のひき 衣のう 衣のせい
 こうじんごうに 衣のれい - しんじてう衣ごうに 衣のく かたど
 衣の じと 衣の とんで 衣のやうしんじゆ 衣の 衣のべし



三宝荒神和讃

(南無三宝荒神尊。本地は大日文殊尊。

大聖不動明王の、三尊仏に坐ませり。

衆生済度のそのために、(き)

蓮の台の高きより、弘海の谷の底深く、

われ等が娑婆の慈父となり、三宝忿怒顕現し、

大荒神となり給う。扱また竈に坐まして、

福徳田満安穩に、守り給うとの御誓願。

老若男女諸ともに、竈大事と尊べよ。

願ひ通りを叶はせる。子孫繁昌と長久と、

勇猛大荒神の恵みなり。短き命も長命に、

朝夕守られ給ひける。(き)

今で富貴があるとても、神の恵みに叶はねば、

後には貧苦や病となる。

貧乏も無福に暮すとも、

荒神念ずる輩は、後には富貴となることぞ。

家の断絶いたすのも、災ひ去つて栄えるも、

おこる火難の火も消えて、天魔外道も近付かず、

悪病諸病も遁れうる、

これほど守られ給ふのに、(き)

(き)竈を穢し粗末せば、

大荒神も意も荒れて、災難けだいとなりぬるぞ。

竈の辺は大切に、濡らさぬやうに心掛け、

積める薪も気を付けて、穢さぬやうにいたしつ、

掃除第一火を消せよ。(き)

大荒神の戒めに、

如何程度が立つとても、

竈の前にて怒るなよ。胸の苦しみ絶えてなく、

朝夕ともに穏やかに、親孝行の氣になつて、

親の心を喜ばせ、兄弟夫婦睦まじく、

親族他人と和合して、楽しく月日を送るべし。

大荒神の喜びぞ。(き)

影や形に添う如く、家やその身に付き添ふて、

三世の諸仏と諸ともに、五穀は一粒万倍に、

万の宝は満つるぞや。家業商売繁昌す。

何ごとにもも穏やかに、現世は息災安穩に、

未来は必ず成仏と、

導き給ふとの御誓願。

荒神經に説かれたり。信じて疑ふ心なく、

竈大事と尊んで、朝夕信心いたすべし。

南無三宝荒神尊

八臂荒神経

演唱 中野清信

採譜 大原順子

ふんせつ... かくのこくわれまき ちとほし けしや 石の きかんさんどの
 しつじやをいせしてはいちに ぬけをふき 手取ひつこのいせをけし せつせつ
 石のたふて やつあし につ てしつはの けしは けえてわくわく
 石のいんげんをたて このけのけのたかに けしする けえんきけえて
 のたまわく われだいにたはは けしさいのしつせつに おしてまはけ
 してなんじややくやくべし けのけい けいけい けいけい けいけい けいけい
 けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい
 かとこのけいけい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい
 もふかきあつ ひん にてあまけり けのけい けいけい けいけい けいけい けいけい
 けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい
 けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい
 けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい けいけい

八臂荒神經

仏説三宝大荒神福德圓滿陀羅尼經

是の如く、我れ聞く一時、仏、昔、祇園三土の精舎を出して、大地に火風を吹き来たいて、是の家を消滅するなかに、面て八ツ、足九ツ、手十八の荒神答えて曰く、我れ何の因縁を以てこの炎の中に住すること、焰鬼神答えてのたまわく、我れ大神なれば一切の衆生、時にあいして、又は是して汝も利益を説くべし。その時、大荒神は仏前に香をたき、呪を解いてのたまわく、ノウマク・サルバ・タタギヤタ・ノウマカ仏法荒神、ウンヌン・ソワカとこの呪を三べん解き終わつて、乃至六種震動すれば、天よりも風火を降ろす、飛雲にて天下り、その時、火炎の滅する時、大荒神は不可思議、識徳あるべし、真相の面てを八ツ。第一に大日如来、第二に阿弥陀如来、第三に釈迦牟尼如来、第四に文殊師利菩薩、第五に普賢菩薩、第六に地藏菩薩、第七に龍樹菩薩、第八に聖觀世音菩薩とのたまわく。

十八の手に十八の迦羅。九ツの足に九せんをふみ、腹は大海の如く。眼は七曜九曜二十八宿。地の三十六金。又は、日月ともない我が真如も知らんと思わん者は、こく風を持つて推し測るべし正真現じてしみとなし、かくの如く大神宮を住して宮中はなれることなし。善心を生じ、善心を投ずる時には悪心を生じ、悪心を投ずる時には善心を生じ、善を衆善と念じるものは、我れまず灌頂すべし。これを念ずる輩は、真言、阿毘経あつて仏道成じて、而も禮をなして去りぬ。仏説大荒神福德圓滿陀羅尼經。

盲僧琵琶の音楽



日向盲僧永田法順師弹奏誦経
1975. 7. 16 於 極 楽 寺



国東盲僧 高木清玄師と中野清信師の弹奏誦経
1975. 7. 16 於 極 楽 寺



福岡市高宮成就院における梶谷清隆師と栗須清英師地神経の弹奏誦経
1975. 7. 14 於 成 就 院